

スイス連邦工科大学ローザンヌ校(EPFL) 留学報告書

技術経営戦略学専攻 修士2年 阪本絢子

2013年9月8日に両親と姉に見送られて関西国際空港からスイスに向けて旅立ちました。途中ヘルシンキで3泊し、11日にスイスのローザンヌに到着しました。空港のあるジュネーブや大学のあるローザンヌはフランス語圏なので、フランス語を話さなければと力んでいましたが、鉄道のスタッフや大学のスタッフは基本的に英語が通じました。滞在した寮は Atrium Residence という寮で、大学が EPFL の学生に限定して提供している寮です。2013年にできたばかりの新しい寮で、寮の一階にはスーパー、美容院、歯医者、レストラン、カフェや薬局があり、非常に便利で快適でした。大学は駅を挟んで向かいにあり、徒歩5分程度のところにありました。寮では、4人でキッチンとリビングルームをシェアし、各々の個室にはシャワーとトイレが付いていました。私のフラットシェアメイト3人のうち2人が男性であり、他のフラットも男女比が1:1であったので、日本との文化的な価値観の違いを感じました。フラットメイトはフランス人の男の子2人とジュネーブ在住歴17年のフィンランド人の女の子で、皆フランス語が流暢なので、私のフランス語を向上させる上でとても良い環境でした。スーパーに買い物に行くと、円安の影響は多分にあるにしても、乳製品以外は日本よりかなり物価が高いことに衝撃を受けました。マクドナルドのバーガーセットが1300円程度し、レストランでランチをすると最低2000円程度はかかります。大学内の食堂ではランチは1000円程度なので時々利用するとしても、基本的には自炊を余儀なくされました。9月12日には留学生を対象にしたオリエンテーションが開かれました。大学に占めるスイス人は50%以下でとても学生の国籍が非常に多様な大学であるようです。実際、オリエンテーションだけで20カ国以上の学生と話したと思います。私の所属は、College of Management of Technology でした。

授業についてですが、こちらの授業は「双方向型」だと感じました。ほとんどの授業では授業中の発言量が成績に反映されるようになっていきます。また授業中にグループでディスカッションをさせられる機会も多く、ほとんどの授業でグループワークが課せられました。驚いたのは、プレゼンテーションのみならずレポートもグループで書かなければならないことがしばしばあったことです。日本ではプレゼンとはもかく、レポートは個人で書いたことしかありませんでした。学科が経営に近い分、グループワークを通してコミュニケーション能力やチーム運営能力を鍛えようという狙いがあるのだと思います。グループワークのおかげで、色んな国の友人をたくさん作ることもできただけでなく、英語を用いて議論する訓練にもなりました。教授が対話形式の授業が上手いことはもちろんですが、学生も積極的に発言していきます。授業が始まって最初の頃は

間違えるのが怖くて物怖じしてしまうことの方が多かったですが、次第に毎回の授業で自分の意見を言えるようになってきました。

また、もう一つ日本の授業と異なると感じたのは、大学発のスタートアップと連携した授業が提供されているということです。Entrepreneur Laboratoryという授業では、大学発のスタートアップ7つのうちから好きなスタートアップを選び、その起業家の指示を仰ぎながら一学期間一グループ4人でプロジェクトを行いました。私は高級時計の模造を防止するための技術を開発したスタートアップを選びました。関連するマーケットの調査を行うことになり、スイス国内の時計会社やガラスメーカーにコンタクトを取りました。スイス連邦工科大学ローザンヌ校(EPFL)は起業へのサポートが手厚く、東京大学に比べて圧倒的に大学発のベンチャー企業の数が多いようです。EPFLの博士課程中にヘルスケア分野で起業を行い、大手医療機器メーカーに会社を約100億で売ることが決まった起業家の方から話を伺うことができました。起業の流れ、開発した手術用の医療器具を実際に患者に用いた際に大きな効果が得られたときの喜び、そして家族関係など公には話せないような内容の話聞くことができ、非常に面白かったです。今までで一番起業というものが身近に感じたと同時に強い興味を掻き立てられた瞬間でした。

授業の構造以外に、学生の国籍の多様さが授業をさらに面白いものにしていると思いました。ケーススタディーについて議論している際にも色んな国の企業の事例が学生側から上げられました。特許の仕組みについて学ぶにしてもスイスだけについて学ぶのではなく、アメリカ、ヨーロッパや日本など色々な国の事例が出ました。EPFLで学ぶメリットの一つはその科目の内容のみならず、この多様性という特性から色んな国の文化についても自然と学ぶことができるという点であると感じました。例えば、ある授業のグループワークではアメリカ人、マケドニア人、ポーランド人と一緒に行いました。こういった多国籍の環境のもとで勉強する経験こそが、のちのち多国籍企業や国際機関で働く上で非常に役に立つのだらうと思います。

夏学期にはEPFLのRenewable Energy Science and Engineering LaboratoryのSophia Haussener教授の下で研究することができました。テーマは「Investigation of locations for artificial photosynthesis processing plants operating efficiently, economically and sustainably」です。太陽光による水素生成は私には新しい分野であったので、大量の関連論文を読み込み、バックグラウンドを理解しつつ、最先端の研究内容を把握することから始めました。週一回で教授とミーティングを行い、アドバイスをもらいながら研究を進めました。基本的には学生の自主性に任せるが、必要なアドバイスやサポートをしっかりと与えてくれる教授の姿勢は、学部時代放任主義の教授の

もとで研究した私にとっては新鮮で本当に有り難いものでした。学期末にはMATLABやGISを利用した研究結果を最終的に論文にまとめて提出しました。提出後に直接フィードバックを貰え、各項目に対して評価とアドバイスを貰えたのは今後の私の研究において大変有意義でした。教授は私の論文に大変満足してくれたようで、結果として優が与えられました。今回の研究内容は東京大学での修士論文研究に繋げる予定をしています。

課外活動としてまず一番に上げられるのが、大学近くの地元楽団(スイスではFanfareと呼ぶらしく、スイス各地に存在する)での活動です。

2013年の10月に念願のクラリネットを始め、それと同時にこのLa Clé d'Argentという楽団で練習をし始めました。EPFLの学生がこの楽団でクラリネット奏者を探しているという情報をFacebookで告知しているのを偶然見つけ、断られるのを覚悟で連絡してみたのがきっかけでした。クラリネットの吹き方を教われたらいいなという気持ちで練習を見に行くと、個別練習は一切なく、次のコンサートに向けた全体練習のみでした。クラリネット奏者として紹介された後、楽譜一式を渡され、いきなり全体練習が始まった時は、正直行ったことを心の底から後悔し、案の定全く吹くことはできませんでした。しかし、他のメンバーに暖かく歓迎され、指揮者の方から「4月のコンサートまで時間があるから少しずつ吹けるようになればいい」とメールまで頂き、せっかくの機会だから必死に練習して、コンサートに間に合わせようと思ひ直しました。

すでに20年以上の経験を持つクラリネット奏者が二人いるおかげで、私は最も簡単な第三クラリネット奏者のパートを任されました。2014年の4月に第27回目の毎年恒例のコンサートがあり、それに向けて全部で10曲ほど練習しました。最初の1,2ヶ月は下手すぎて練習に行く直前に気持ちが重くなっていたのですが、冬休み中に猛練習をしたこともあり、次第に毎回の練習がとても楽しく、すべての曲をなんとか吹けるようになりました。メンバーのほとんどは地元の社会人または高校生であり、誘ってくれたEPFLの学生一人以外は英語がほとんど話せず、会話や指揮者の練習中の指示はフランス語でなされました。最初の頃は指揮者の人がどこから演奏を始めるように言っているのかさえ聞き取れず、隣の人に教えてもらうという状況でしたが、逆にそういった状況がフランス語を必死に勉強するモチベーションになり、次第にすべて聞き取れるようになりました。

大学ではあまりスイス人の学生と知り合う機会がないので、この活動を通してスイス人と仲良くなり、文化や価値観を知る良い機会になりました。スイス人コミュニティーは閉鎖的だと聞いていましたが、一度コミュニティーの中に入ってしまうえば家族のようにその結びつきは強いようです。20才程年上のクラリネット奏者の方に「楽団のメン

バーは家族だから、君も僕のことを「Tu」（Youを意味する。フランス語では親しくなるまではVousを使う）と呼んでいいよ。」と言われたのが印象的でした。結果として4月のコンサートは成功に終わり、非常に楽しむ事ができました。大勢で一つの音楽を奏で、人を楽しませることの喜びを初めて体験することができました。最後のコンサート後には、指揮者の方から「日本人にしかこんな短期間でこんなにも飛躍的にクラリネットを上達することはできないだろう。とても感心した。」というメールを頂くことができました。また、オーボエ奏者のスイス人女性は、日本愛好家ということもあり、特に親しくなりました。帰国後も頻繁に連絡を取り合っており、またスイスに遊びに行く際は、家に泊まっていいとまで言ってくれています。

ジュネーブには多くの国際機関が存在し、常にインターン生を募集しています。私は約10の国連でのインターンシップに応募し、結果として国連環境計画(UNEP)のジュネーブオフィスで受け入れてもらえることになりました。面接時にはフランス語での会話能力を試されましたが、留学中に培ったフランス語で何とか合格しました。大学時代から国際機関で働く事が夢であり、インターンシップはそれに大きく近づく一歩になりました。インターンシップは2014年9月から12月まで行いました。

交換留学を通して、私は自分の夢へ一歩近づくことができたと感じています。授業や研究を通して得た学び、課外活動を通して得た学びや語学力の向上に加え、精神的な強さ、自分と異なる価値観や生き方を持つ人への寛容さなども身につけられたと思います。それらを含めたすべてが今後の私の人生をより実り多いものとしてくれると思います。日本を離れて、より一層日本を好きになりました。ヨーロッパ諸国を旅行する中で、各国にしかない良さにも気づきました。そして同時に完璧な国は存在しないと気づきました。日本にも欠点はあります。しかし、それを含めて日本を好きでいられるのはやはり私を生み育ててくれた国であり、感謝の気持ちがあるからだと思います。将来的にどんな仕事に就くのか、何を成したいと思うのかはまだ分かりませんが、どんな形であれ日本とそこの住む人たちのために貢献し、それでいて他国を理解し受け入れ、世界的な視野で働いていける人間になりたいと思います。

スイス連邦工科大学ローザンヌ校に留学する機会を与えて下さった、関係者様に深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



写真 1:寮でのホームパーティー



写真 2:友達の家でのホームパーティー



写真 3:寮でのホームパーティー



写真 4:スペインのセビーユ地方にて



写真 5:モロッコのシェフシャウエンにて



写真 6:年末の学科のクリスマスパーティー



写真 7:所属していたビッグバンドのコンサート